

これみ
週刊「考歴民」No12

2021.6.14 交野古文化同好会

考古・歴史・民俗の頭文字を取って考歴民（これみ）と名付けました。

葛城北峯の宿考・木下蜜運著

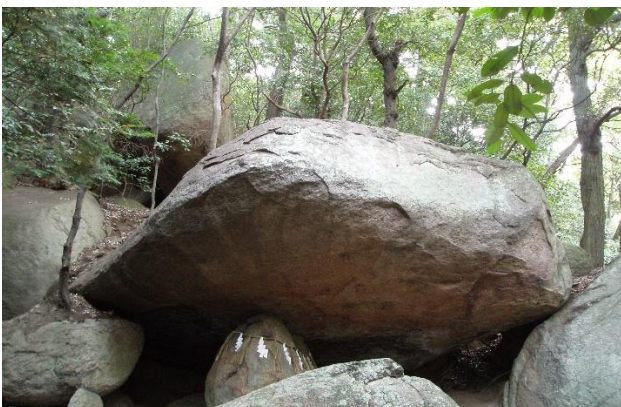
第十一は師子石屋。今は獅子窟寺という。



交野の里を一望できる尾根上にこれまた巨岩重畳する霊所がある。



突き出た岩根は牙をむく獅子吼の状を形どり、まさしくそこは師子の石屋。



当時の縁起にいう。役行者金剛山に居するのとき、この山頭に五雲たなびき並びなき霊所と望まれ、錫を飛ばしてここに至り、窟中に宴坐す。



石窟内・石造弘法 ↓ 石窟内より↑



たちまち浄瑠璃世界のひろがりを見、薬師如来の浄土とすという。

その後僧正行基ここを梵刹としたと伝える。



ところでこの寺の山号を普見山と称し岩窟を金剛般若窟と称している。



松宝寺（松宝院址）

宝積経には文殊菩薩の靈場と称した方が理にかなうようでもあり、行基菩薩開創の伝承もどうやらその辺から出てきた説話のようにみうけられる。さらに同寺の縁起はいう。天長年中弘法大師この山に至って仏眼明妃の法を修すと。時に七曜降下し、天の川の左右に散在すと。文殊師利は諸仏の母なるが故に仏眼仏母に通じ、仏眼尊、八字文殊ともに七曜九曜二十八宿を司る。交野に伝わる星の森の伝承は獅子窟寺をとりまいてさらに広く輪をひろげてゆく。

獅子窟の周辺奇岩多く、験者の靈所にふさわしい秀困気を持ち、点点する巨石怪石は次の靈所へと人々を導いてゆく。

ここまで「葛城北峯の宿考」の原文とおり。



仁王門跡（昭和9年倒壊）

追記

元和元年（1615）大阪夏の陣の前、大坂城防備のため、当寺へ応援を求めたが、前年の冬の陣に外濠を埋められているので、もはや落城が明らかだと、応援を断った。

これで大坂方の怒りをかい、当山の堂塔はもとより塔頭書院など焼き払われてしまった。

当山塔頭十二院は次の通りであった。

吉祥院・松宝院・薬師院・華嚴院・愛染院・溪月院・井上院・文殊院・日光院・普賢院・西院、このうち現在に残って独立の寺院となっているのは松宝寺（松宝院）だけである。



阿形

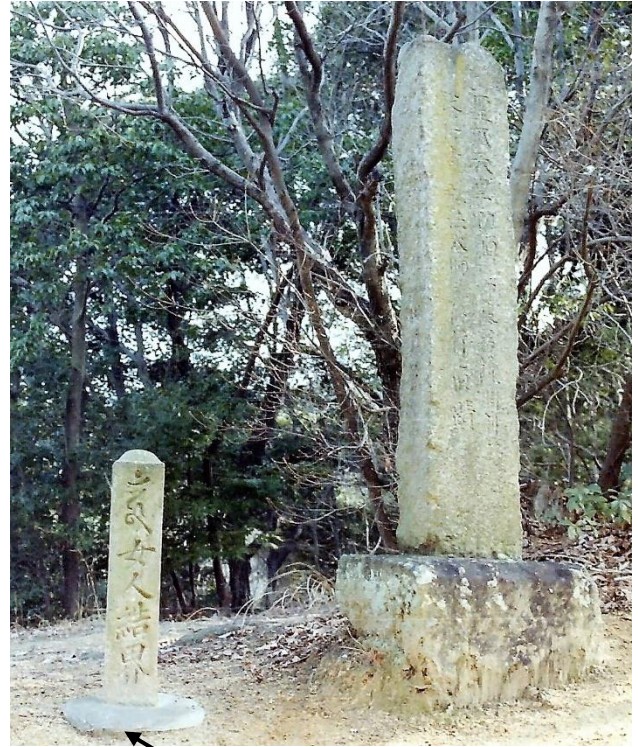
吽形

現在は薬師堂に間借りしておられます



ア
ビ
ラ
ウ
ケ
ン

アピラウンケン碑



女人結界石標（現在は無い）



蓮華座

永禄六年（1563）癸亥 蓮華座の右側
三月十二日 蓮華座の左側
蓮華座の下には、一結衆 11 名が逆修供養（死んで極楽にいけますように、生前仏事を修め冥福を祈ること）のために造立したことがわかります。



次号 6/21



亀山さんの石段 108 段(現在 104 段)